

歴史の文差点

武藏野大特任教授 山内昌之



一律10万円給付の攻防

言葉である。最近の公明党・山口那津男代表が1人10万円の現金給付を認めさせた手際の良さを見ると、ついで、リヴィウスの言葉をつい思い出してしまつ。一世帯あたり30万円の給付と

感もある主張を通した政治家なら、普通であれば手柄頬をするかもしれない。しかし歴史でも政治でも、自分から得た成果を安倍晋三首相の「不名誉」だと印象づける必要はない。

「いぢ
ものが、
したもの
したが
る」

『ローマ建國史』を書いた最後に投入されたとかく、すべてを決定に思われがちなのである。

いつ補正予算案をひっくりかえしたのだから、政治的には剛腕に違いないが、表舞台ではそう見せないと山口氏の巧みさを感じざるをえない。1人10万円という分かりやすくスピ

10万円給付は全都道府県での緊急事態宣言と結びつけて正当化されるようだ。もともと10円と30万円のいずれをとるのか、首相その人にも選択の余地が残されていたとも聞く。財務省はじめ政府の合理的思考からもあり、Jの旗を連立維持の条件と関係づけて山口氏は遊び過ぎると首相を押ししたのだ。埋もれた安倍首相は、それで土俵際で踏ん張った。それは、給付を緊急事態宣言の全国化という、生命を救う別の普遍化といふことではないか。

一律10万円給付の攻防

導かれた30万円の難点は、受け取れる国民の数が限られており時間もかかることであった。自民党や公明党には政府与党として新型コロナ感染危機に直面した市民、特に個人事業主や低所得者を早期に救済する義務

政治的リアリティーに結びつけたことではないか。

16世紀フランスの哲学者、エントニーユは「名譽以外のものなら、すべてのやりとりができる」と述べた。安倍首相が10円給付の提案を安易に受け入れ

ていたなら、首相の政治生命は名譽とともに危機にひんしていがちかもしれない。首相や代表になるとほどの政治家たちにとて、自分の金や財産なら他人に分けられても、名譽や栄光を失へることはまずないだれつ。これは古代ローマから近世フランスそして現代日本を通じてあります。眞理ではなかろうか。

新門產經

10万円給付は全都道府県でのもあつ、この点を連立維持の条件と関係づけて山口氏はがんば
緊急事態宣言と結びつけて正当化されるよつた。もともと10万円と30万円のいずれをとるの
か、首相その人にも選択の余地が残されていたとも聞く。財務省はじめ政府の合理的な思考から
省はじめ政府の合理的な思考から、生命を救つ別の普遍化という、も土俵際で踏ん張つた。それ
は、給付を緊急事態宣言の全国化へと導く手段として、山口氏はがんばる姿勢を高く評価す
る。しかし、この行動は、政治家としての山口氏の本質を示すものであり、その行動は、政治家としての山口氏の本質を示すものであり、その行動は、政治家としての山口氏の本質を示すものであ
る。